

ひきこもり支援における事例研究

—かたつむり学舎での実践から—

福 崎 は る

要 旨

「ひきこもり」という言葉は、広く一般に知られるようになったが、ひきこもりの定義とその支援をめぐる議論は、未だ収束していない。

そこで、本稿では、筆者が運営している「かたつむり学舎」¹⁾（不登校・ひきこもり支援のための民間機関）での実践と当事者へのインタビューを通して、ひきこもりに効果的な支援を明らかにすることを目的とする。

この実践の結果、明らかになったことは、①家族以外の他者が当事者と関わり、②彼らの存在を全肯定し、③社会的規範に囚われることなく対話しながら当事者が行動を決定し、④決めたことを実行できるように援助し、⑤状況に応じていつでも変更・調整し、⑥やりたいこととできることが重なる選択肢を社会の中を探したり創ったりしたことである。この①～⑥の繰り返しは、社会の中で生きていくために、誰にとっても必要なことである。そして、このような体験が何らかの理由で妨げられた時、一人ひとりへの社会的支援が必要となってくるのではないだろうか。

はじめに

2010（平成22）年5月に厚生労働省から、「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」²⁾が、また同年7月には内閣府から「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書」³⁾が出され、ひきこもりとその支援に対する社会的ニーズの高さと、当事者、家族の抱える困難さは、以前より浮き彫りになった。しかし、ひきこもりの定義とその支援をめぐる議論は、未だ収束していない。

「ひきこもり」は、1990年代「その時代、その文化にとって、何がしかの必要性を持って作られた」一つ概念である（山田 2011）⁴⁾。社会の中で作られた概念を扱う以上、「ひきこもり」をどう捉えるかということは、現代社会をどう捉えるかということと密接に関連してくる。またひきこもりは、社会と人との関係性の中で起こるため、「人が社会的に生活すること」に対して、どのような立場をとるかという専門家や研究者の価値観とも関わってくる。大きく分けて、「ひきこもり」を「肯定的」にとらえるか、「否定的」にとらえるかなど（山田 2011）⁴⁾、今なお20年以上に及ぶ

議論があり、「ひきこもり」の要因やその支援のあり方について、政治、経済、医療、教育、福祉、環境、哲学など様々な分野との関連性が示唆されている。これは裏を返せば、「ひきこもりとは何か」という問い自体が非常に根源的で、かつ、社会や人の生き方全体に関わる重要な問いであることを物語っている。

そこで、本稿では、千差万別なひきこもり像のすべてに共通する「社会的接触が極度に少なくなっている」行動様式を、ひきこもりと呼ぶことにする（吉川 2011）⁵⁾。

まず、ひきこもりに対して、支援の現状はどうであろうか。2010（平成22）年4月に施行された、内閣府「子ども・若者育成支援推進法」⁶⁾では、「子ども・若者の抱える問題」に対しての対策として、「社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者を地域において支援するためのネットワーク整備」や「子ども・若者支援施策のための枠組み整備」を掲げている。そして、その支援が目指すところは「円滑な社会生活（就業・就学等）」と明示されている。これは、「就業・就学」が前提とされ、それに至る道のりとしてのネットワーク支援を想像させる。この「（就業、就学等）」の「等」の可能性として、「円滑な社会生活」のために、「子ども・若者」に、どのような選択肢があるのか明確にされていない。

はたして、ひきこもりの当事者たちを支えるものが、就労支援なのかということについて、石川（2006）⁷⁾は、『働くのは当然だ』という意識から自分を厳しく責め、それが社会に出ることへの躊躇や諦めへと連鎖し、劣等感が深まっていくという悪循環を指摘し、『ひきこもり』の支援では就労を直接の目的にすることに対して慎重さが求められてきた」と述べている。「就労・就学以外」の支援とは、「社会的に生活すること」への支援、つまり福祉の支援であるが、「障害者」、「経済的困窮者」の枠組みに当てはまらないひきこもり当事者や家族への福祉的支援は、未だ充足していない状況である。

さらに、ひきこもり支援に関する様々な実践が行われているが、「実際には体系的な支援を受けるのが難しく、「ひきこもり関連機関相互の連携が取れているとは言い難い状況」で、「専門知識を持った専門スタッフの絶対数不足」や、「民間支援団体の財政難、就労先不足」など、未だ多くの課題を抱えているのが現状である（鈴木2004、境ら2004、唐澤ら2002）⁸⁾。

一方、自治体や社会福祉法人、民間機関などによる電話・来所相談、講演会、家族教室、訪問支援、デイケア、フリースペース、サークル活動など、役割別、機関別、窓口的、集団的な取り組みはある。しかし、「社会的に生活すること」の困難さを支援するために、所属する相談機関の枠を超えて、当事者とともに動いたり、当事者が必要とする社会資源につないだりする、ソーシャルワーク的な支援は皆無に等しい。そのため、多くの場合、その役割は、家族に委ねられているのが現状である。ソーシャルワーク力・コミュニケーション力に長け、さらにそれらに尽力できるだけの時間的・経済的余裕がある家族であれば、多くの社会資源とつながり、当事者が「社会的に生活する」ために必要な支援を知ることができるかもしれない。そして、さらに家族が、当事者と円滑な関係性を保ちつつ、必要な支援を良いタイミングで当事者につなぐことができれば、当事者が納得する形での社会参加に必要な支援を得ることができるかもしれない。しかし、そうでない家族は、限られた時間の合間に、相談機関のアドバイスをもとに、自ら奔走し、当事者との生活の不安を家族だ

けで抱えて時間を過ごすことになる。後者のような当事者・家族に対しては、ソーシャルワーク的な支援が必要なのではないだろうか。

本稿では、筆者が運営する民間機関「かたつむり学舎」でのソーシャルワーク的な支援の中で、当事者たちが少しずつ変化し、社会とつながっていく過程を振り返った。そして彼らにとってのひきこもり体験とはいかなるものだったのか、また社会につながっていく過程で、どんなことが当事者や家族への支援として効果的だったのかを検証した。

かたつむり学舎の概要

「かたつむり学舎」とは、教育・カウンセリング・ソーシャルワーク機能を備えた、ひきこもりの当事者・家族の支援を目的とした民間機関である。

一人ひとりに合った社会とのつながり方、つまり社会の中で「どう生きるか」を一緒に考え、本人の希望や状況に合わせて、社会とつながるために必要な力や方法を身につけたり、生き活きと生活できるフィールドを探したり、創ったりするための支援を行っている。そのため、関わる側の意識として、既存の社会的価値観からなるべく自由な立場を維持することを心がけている。

支援の仕方としては、カウンセリング、自宅訪問、利用施設・アルバイト先などへの同行・連携、学習サポート、外出訓練など、当事者・保護者からの要望にできる限り応じている。学習サポートやカウンセリングなどを行う場所として、アパートの1室を賃借している。

専属スタッフは筆者一人であり、必要に応じて臨時スタッフ5名（臨床心理士資格保有者もしくは教員免許保有者）の協力を得ている。

提示する二つの事例については、かたつむり学舎を利用した当事者で、ひきこもる以前から筆者が勤務するクリニックでクライアントとして関わりがあり、ひきこもった後、社会につながっていくまでの変化の過程が分かり、かつ了承を得た人物のケースである。事例に関しては、関わりごとの筆者の記録をもとに、保護者の発言、電話、メールのやりとりの記録などを合わせ、時系列にまとめた。それを彼らの変化の過程ごとに区切り、それぞれの変化の過程ごとに、考察を加えている。また当事者たちが社会とつながり、かたつむり学舎を卒業した後、筆者がまとめた事例記述を当事者たちに披瀝し、記述に齟齬がないか確認をとった。さらにそれぞれ2回ずつ当事者へ、記述した事例をもとにインタビュー調査を行った。両者に許可を取って、インタビュー内容は録音し、トランスクリプトを作成し、共通理解を図った。

事例1：山川友里さん（仮名）との関わり

家族の状況

父親、母親、友里さん、弟、父方祖父、父方祖母の6人家族。父方祖父が入院され、弟は施設に入所し、X-1年2月以降、4人。〈父親〉仕事にでている。〈母親〉パートに通いながら家事全般を行なっている。〈父方祖母〉家事手伝い。〈弟〉友里さんより2歳年下で、軽度の知的障害と広汎性発達障害がある。知的障害児施設に入所し、生活訓練を受け、現在も施設から特別支援学校に通い、土日やGW、盆、正月などの休日に、時々自宅へ帰省している。

〈友里さん〉弟からの暴力や友人間のトラブルをきっかけに、中学2年生の3学期より学校に行き渋るようになり、不登校になったが、中学3年時の修学旅行を機に週1～2回は登校するようになった。全日制高校を受験し、希望をもって入学したが、勉強についていけず、一週間後から登校できなくなった。ほとんど自宅で過ごし、自室のカーテンはいつも閉めきっていたとのこと。高校に行けなくなった当初、学校からの紹介で、公的相談機関へ母親が相談に行った。そこで、サポート校やフリースクールを紹介され、見学に行ったが、集団的付き合いが苦手なことが大きく影響し、場の雰囲気にも馴染めず、希望しなかった。自宅では、「学校に行かなければいけないのに行けない」と泣きわめいたり、家事を行う母親の後をずっとついてまわったりしていた。

自宅から出たいけど出られない時期（カウンセリング開始）

X年5月下旬（高校1年）、筆者のクリニックに母親と来談した。カウンセリングでは、友里さんが今後どうしていきたいか、自宅での心地よい過ごし方について母親と一緒に相談していった。「自宅で何かやることがあったらいい」とのことで、家の手伝いをするように決め、取り組んでいた。さらに「自宅にいると気が滅入るが、かといって行ける場所もない」とのことだったので、友里さんの条件に合う自宅以外の出掛ける場所を探した。

同年6月の時点で、現在の高校は留年が確定したため、友里さんが続けないと決めたが、代わりに何をするか決まらず、休学という形をとった。塾や習い事、その他イベントなどは、「知り合いに会いそう」で人目が気になって行けず、家庭教師は強く拒絶した。同年7月、月に1～2回開催されていた発達障害の子どもが通う民間のパソコン教室なら「知り合いにも合わず、時間帯も行きそう」とのことで、通うこととなった。

友里さんは、学校に行っていないことに負い目を感じて、日中は他者の目が気になり、また知り合いに合わせる顔がなく、外出できずにいた。石川（2006）⁷⁾は、ひきこもりの当事者自身の「強い規範意識が、悪循環を形成している」ことを指摘している。つまりこの時点では、登校や就職を目標にする社会的規範に添った働きかけをすることが「当事者の精神的苦痛を助長させる」ということである。したがって、このような時期には、ひきこもる現状を肯定し、安心してしっかりひき

こまれるような関わりが望まれる。

芹沢（2011）⁹⁾は、ひきこもりを「存在論的自己が、自己－自己の連続性、同一性－をそれ以上の損傷から守ろうとして、その環境を離れ、連続性が保てそうに思える新たな環境（多くは両親、家族のいる場であり、そこにおける安心を保障された自室）へと移動しよう」とした状態だと捉えている。

やりたいことと行き詰まり

同年7月～10月、友里さんは、自分がやりたいことが（能力的に、もしくは現時点ではまだ）できないということを実感するまで、直接的な体験を多く必要とする人だった。保護者と友里さんにそのことは伝えたが、友里さんが納得して自分で答えを出すまで、一緒に体験を重ねる時間が保護者にはなく、膠着状態が続いていた。

そこで、この状態を打開すべく、「何でも思ったことができるとしたら、何がしたいか」尋ねると、「東京に行ってお笑い芸人の裏方で働く人になりたい。東京でアルバイトをしつつお笑いのスクールに行きたい」と言った。これを受けて、筆者が母親を説得し、東京に行き、家賃やバイトを調べてくるようお願いした。そして家賃やバイトを調べたり、お笑いの劇場に観に行ったりした結果、「今の時点で東京に行って一人暮らしをするのは無理」だと納得し、「いつか東京で一人暮らしができるようになるために、今できることをしよう」と前向きになっていった。

次の希望は、「介護のボランティアに行きたい」「毎日行ける場所が欲しい」ということだった。筆者が介護施設に受け入れをお願いし、母親が介護施設まで連れて行くことになったが、なぜか途中で「行きたくない」と言って、車から降りず、約束の時間に行かないということが続いた。母親は、「私と一緒にだと友里がぐずって、甘えて困ります。自分から『やる』って言っていたのに、しなかったり。ぐずぐず言って……、で、『こうしてみたら？』と提案するんですが、それも嫌みたいで。こっちの言うこともきかないので、『もう勝手にしなさい』ってなるんです」と話していた。

外出に慣れる

同年11月、母親のみが友里さんに関わって、社会とつなげていくことが限界になったことから、筆者がかたつむり学舎を設立し、母親の代わりに友里さんと一緒に社会とのつながりを探していくこととなった。介護のボランティアには筆者と一緒にいき、高齢者の方との会話、デイケアの掃除、入浴介助の手伝いなど、三日間体験することができた。その結果「イメージと違った。別のことをしたい」という要望がでてきた。

次の希望は、「高卒の資格を留年せずに取りたい」ということだった。ただ友里さんは高等学校卒業程度認定試験を受けるほどの学力をつける自信はなく、外出も一人では難しかったので、スクーリングの日数が少なく、インターネットを利用して容易に進級できる通信制高校を筆者が紹介し、転校手続きを行った。同年12月、全日制高校1年生から通信制高校1年生となる。通信科へ転

校して、高校の課題が送られてくると、課題をどんどんこなし、約二ヶ月程度で、一年分を終わらせ、喜んでた。

さらに「自宅以外の通える場所が欲しい」ということだったので、かたつむり学舎へ通い、一人では学習が難しい数学をスタッフと学ぶことにした。通えるようになるまで、両親とともに段階的に外出訓練を行っていった。

少しずつ、外出に慣れてきた頃、通信制高校のスクーリングが近づいてきた。今の段階で、スクーリングは難しいかもしれないと筆者は考えていたが、友里さんは「絶対行きたい」と言っていたので、そのための準備をしていった。スクーリングでどんなことをするかを問い合わせ、友里さんに伝えた。さらにスクーリングの一週間前に母親と一緒に同じ電車で会場まで下見に行くことを勧めた。そうして望んだ初日は風邪を引いて行けなかった。その日の夜、友里さんから「風邪はよくなったけど、明日もスクーリングに行けそうにない。でも行かないと留年になる。どうしよう」と泣きながら電話があったので、「無理して行かなくていいよ。留年しても大したことはない。大丈夫。私は明日、山登りに行くから、スクーリングに行けなかったら、一緒に山登りに行こう」と対応した。これは「『就学』という社会的規範から外れても大丈夫だよ」というメッセージを伝えたいと意図した発言であった。しかし二日目はスクーリングに行った。引率した母親と会場最寄りの駅ではぐれてしまうハプニングはあったものの、スクーリングを終えた。翌日、「昨日はありがとうございました。スクーリングに無事行けました。山登り行けなくて、すみません」とメールが来た。

外出訓練1ヶ月後には一人でバスに乗って、かたつむり学舎に通えるようになった。さらに「人との関わりがもっと欲しい」と希望し、1ヶ月に1～2度、自宅に訪問してもらえるメンタルフレンドという公的な支援を利用しはじめた。「話し相手として楽しかった」とのことで、約1年継続した。高校2年生への進級がほぼ決まり、バスで外出することができるようになったこともあって、さらに自信がつき、意欲的になっていった。一人で外出できるようになると、もともと好きだったお笑いのライブやコンサートなどを見に行くために、自分で時刻表を調べ、ライブのチケットを予約し、バス・電車などの公共交通機関を利用して度々出かけていくようになっていった。

以下、友里さんのインタビューのなかで、「嬉しかったこと」の中で語られた「バスに乗れるようになった」という部分を紹介する。

…バスに乗れるようになったこと。(どうやって?)最初は嫌だったけど、時間が午前中だったので、誰もいないということが分かったんで、それで乗れるようになりました。(乗れない理由は?)ただ同級生と逢うのがいやだったから。(どうやって乗れるようになったの? 時間帯をずらしたこと以外で)それと、最初はなんか途中まで送ってもらって、こっから絶対同級生は乗らないっていうところまで、送ってもらって、それで、それからそこまで迎えにきてもらったり、練習して。

※（ ）内は筆者の発言，以下同じ。

他者の目を気にする友里さんの状況について、石川（2011）¹⁰は、「直接的に『ひきこもり』を非難したことがないとしても、そうした価値観（働いていないことを過度に貶めるような価値観）によって形作られている社会で生き、自らもまたその価値観を程度の差こそあれ共有している以上は、誰もが全くの無関心ではあり得ない。（中略）人々を引きこもらせないような社会を作っていくことが最も広い意味での『ひきこもり』支援であり、それは私たち一人ひとりが、自分の中にある『ひきこもり』を白眼視させるような価値観を見直すことから始まる。」と言及している。

やりたいことにチャレンジながら、パンレストランに通う

X + 1年2月（通信制高校1年）に入ると、「英検も受けたい」と希望したため、かたつむり学舎と一緒に英語の勉強をはじめた。また、将来どんなことをしたいか、やりたいことを尋ねると、「オーロラを見に行きたい」「TV局に勤めて、企画やプロデュースするようなことをしたい」「やっぱりお笑いたい」などいろんな夢が語られはじめた。

「どこに行くにもお金があるので、アルバイトがしたい」と希望したため、適職相談、履歴書の書き方、求人情報の見方など、ハローワークの専門相談員にアドバイスを受けながら、パン屋、うどん屋など友里さんの希望するアルバイト探しを一緒に行っていった。しかし条件に合うものがなかったため、ボランティアから始めることにした。アルバイトではパン屋やレストランスタッフを希望していたことがあったため、筆者が障害者通所授産施設で行われているパンレストランのボランティアを紹介した。最初は、筆者のみが施設に伺い、友里さんの様子をお伝えし、受け入れをお願いした。その後、友里さんと一緒に施設のスタッフと顔合わせをし、同年5月（通信制高校2年）からの受け入れが決まった。パンレストランのスタッフとして、利用者の方と一緒に、珈琲を入れたり、パンを出したり、レジも任された。できる範囲で少しずつ始め、友里さんの体力の状態に任せ、週2～5日の範囲で、9時から14時まで通うことになった。

それと並行して、同年6月～12月、友里さんが自ら「自分の意見が上手く言えるようになりたい。文章がうまく書けるようになりたい」と希望した。そこで、月に2～3回のペースで、かたつむり学舎の担当スタッフから小論文の指導を受けながら、対話する時間を設けた。

この頃から「いろんな人と関わりたい」という要望が多く語られるようになり、全日制高校を辞めてしまったことを後悔し、自分を責めるような発言もあった。「制服を来た高校生を見たら羨ましいなあ」と言うので、「え～？ あの時は制服も嫌だし、絶対学校行きたくないって言ったのに？」と応えると、「そう。あの時はそうだったんだけど、辞めて楽になると自分も普通に学校に行っていたら友達とも遊べたのになあと思う。ちゃんと最後まで続けられないで、情けない」と言っていた。「学校に行っていたらよかったというか、友達を多く作って一緒に遊びたいって気持ちがあるんやね」というと、「そうです」と応えた。「学校を辞めたらから、友達ができない」という社会的規範に沿った考え方で苦しんでいたのが、「学校に行っていなくても、友達ができればいい」

というメッセージを伝えるためにこのような言葉掛けを行った。

ボランティアでは、同世代のおしゃべりできる仲間が出来た。また他の利用者さんをサポートする役割を担うようになった。パンレストランには、利用者として精神障害者の方もいて、友里さんといろいろ話をしているとのことだった。仕事が終わると、友里さんはかたつむり学舎に立ち寄って、パンレストランであったことや一緒に働いている障害者の人たちとしたいろんな話を聞かせてくれた。通いだして数ヶ月後、母親から「家でもほとんど私に付きまわなくなってきた。一人で何か勝手にやっているみたいです」と報告があり、かたつむり学舎のスタッフからも「以前は猫背がひどかったが、今は背筋が伸びて、顔つきもしっかりして明るくなった」と報告があった。

その後、2年近く続けることとなり、友里さんにとって、有意義な体験となった。パンレストランでのボランティアが長期に渡り、充実感をもって続けられた秘訣について尋ねると、以前から「障害者のサポートをしたいと思っていた」、「事務作業ではなく、接客など話したり動いたりした」、「やることがあり、困った時は（レストランの）スタッフがどうしたらいいか具体的にアドバイスをくれた」という答えが返ってきた。以上、友里さんの事例から、当事者が何かを長く続けていくためには、(1) 当事者の希望や夢、やりたいことにつながっていること (2) 当事者の得意な（もしくは好きな）活動であること (3) 役割（具体的にすること）があること (4) 困っている状況を常に把握して、随時、行動面で具体的に当事者にとって可能な選択肢を提案してくれる支援者がいること、が必要ではないかと考えられる。

さらに「どういう時に調子がいいか」という話題から、パンレストランのボランティアについて語られたインタビューを以下に紹介する。

（……それで、調子がいい時と悪い時について……）人に必要とされてると思っていたらよくて、それがあんまり感じられなくなったら悪くなります。（人に必要とされてるってどんな感じ？）頼られてるっていうか……、そんな感じ。パン屋さんのボランティアとか、かたつむり学舎の仕事手伝ったりとか……。そういうふうに誰かの役に立つ。それが。（そうすると調子がいいんだ。）はい。（それ気づいたのいつごろ？）それは高2でボランティアはじめてから。（中略）（ボランティアいきはじめて）はい。中2の前も、そんなこと全然感じずに、とりあえず楽しければいいみたいな。（中2から高2までは？）なんか、そんなん全然。あんまり……。死にたいじゃないけど、なんか、そんな感じ。でも……ずっとたぶん……そう思ってたんで、それが、そうなった感じ。（ずっと思ってたのはいつぐらいから？）たぶん中2のころ……。心の中にはずっとあったと

思います。

芹沢（2010）¹¹⁾の自己の二重性理論に当てはめて考えると、「人の役に立つ」という社会的自己（する自己）が、存在論的自己（ある自己）を脅かすことなく、その優先性を保てている状態と言えるだろう。自己の二重性について芹沢は次のように説明している。「社会的自己と存在論的自己という2つの言葉によって人間存在のあり方を把握しようとするもの」で、「社会的自己である『する自己』は、『できる』を含んでおり、他者の比較・評価のまなざしに介在される。またこの『する自己』の価値すなわち役割・位置・重さ・行動などが、自らの判断で決まるのではなく、他者の比較・評価のまなざしによって決められ」ている。他方、「『ある自己』とは『する・しない、できる・できない』ということとまるでかかわりなく、『いま・ここに・自分が自分として・存在している』自己のことである。」と。

社会的自己が存在論的自己を脅かすことのない場の例として、もう一つ挙げる。かたつむり学舎を卒業した卒業生が遠方から帰ってきた際に「カレーの集い」をした。「カレーの集い」には、新しくかたつむり学舎に入った生徒も参加しており、スタッフ4名、友里さんも含む当事者3名の7名が集まった。

友里さんは、インタビューの中で「もっとあるといい場所」について次のように話している。

こないだのカレーみたいに、仲間じゃないけど、集まりみたいなのがたくさんあったらなあ……とかいいかなあって思います。（集える場）はい。（カレーの集いのどういうところが良かった？）やっぱりなんか、だいたいみんな自分と同じだから。なんとなく分かるというか。何もしゃべらないでも分かり合えるというか。

再び社会へつながるためには、社会的自己が存在論的自己を脅かさない場、つまり「他者のまなざし」による「比較・評価」が「その人の存在を否定しない」と当事者が感じる場である必要がある。逆に言えば、学校も含めた社会の中で、そのような場がほとんどないと友里さんは感じているのである。

大学を受験してみたいと思いつ

X+1年12月（高校2年）の冬休みには、郵便局のアルバイトを行い、初めて3万円稼ぐという体験をした。「友達と一緒に行ったのと、2週間限定というところが良かった。合っていてやりやすかった」と話していた。

X+2年1月、友里さんが見つけてきたある企業の作文コンクール（一般の部）に応募し、入賞し5万円の賞金をもらった。かたつむり学舎のスタッフと小論文に取り組んでいたこともあり、みんなで喜んだ。冊子になった作文を見せながらとても嬉しそうに「自信ができました。お金までもらえて嬉しいです」と話していた。

同年2月には、ほぼ毎日ボランティアに行っていた。さらに進路について、「大学進学したい」といいはじめ、京都大学出身のお笑いコンビが京大に入学した経緯を筆者に話した。また自宅で『東大か、京大に行きたい』と家族に言ったら、『行けるわけないだろう』と家族全員に否定された」と怒りつつもしょんぼりしていた。母親も「お笑い芸人になるって言ったり、東大に行くって言ったり。無理やろうって言う」と怒るし、もうどうしていいか。私は自分の好きにしたらいいと思っています」とやや困りながら話していた。「大学受験のことについて、友里さんと一緒に調べてみますね」と伝え、まず、本屋に行き、入試問題、勉強用の参考書を見た。「これ、全部勉強するの、大変ですね」と受験に対する印象を話していた。次に、大学説明会に行った。「まずは、春に模試があるので、入試がどんなものか一度受けてみてから、やれそうだったら一緒に取り組んでいこう」と伝えた。

同年4月（高校3年）になり、試しに模試を受けてみるが、結果は大学受験自体がかなり難しい点数だった。しかし諦めきれず、地方の公立大学のパンフレットを取り寄せ、「受験勉強がしたい」と言うので、入試科目を調べ、受験勉強を始めた。友里さんにはとても難しかったので、勉強すること自体がストレスになり、受験勉強中はいつもため息を漏らしていて、大変そうだった。「きつかったらいつでも変更していいからね」とこちらからは声をかけながら、一緒に勉強していった。友里さん自身もずっと悩んでいて、体調が悪かった。受験勉強を約2ヶ月試みた後、話し合った結果、得意なパソコンの専門学校に行くことにした。両親もその選択に安堵していた。

パンレストランに通いつつ、パソコン専門学校に通い始める

専門学校は、高校卒業を待たずに7月から通えるとのことで、X+2年7月から週2日通い始めた。その後、ボランティアと専門学校で忙しくなり、いろいろなことが軌道に乗ってきたことから、同年8月をもって、かたつむり学舎も卒業となった（卒業後は、かたつむり学舎の利用料を頂いていないが、関わりは続いている）。

たまに、かたつむり学舎の忘年会やおはなし会などに参加したり、時々友里さんからメールや電話があった時にやりとりをしたりしている。メールでは「専門学校で、ほかの人みたいにうまく話せません。どうしたらいいですか??」「コミュニケーション力をあげるには、どうしたらいいのでしょうか??」「今日、調子に乗って、よけいなことを言って、人に嫌な思いをさせたかもしれません。どうしたらいいのでしょうか?」などの相談が多い。その場合の筆者の返信としては、例えば「うまく話している人のそばにいて、その人がどんなふうに受け答えしているかを見ることがコ

コミュニケーションカアップに役立ちます。うまく話している人の横でここにこ相槌を打ちつつ、感じのいい聞き役をしながら、コツをさぐりましょう」など、それらに対して、一つ一つこちらがわかる範囲で、具体的にアドバイスをしている。返信後、数日以内に、「あれからなんとかやれています。ありがとうございました」など近況を知らせるメールが届くこともある。

最後にインタビューの中で、友里さんにとって、「筆者はどんな存在か」を尋ねた。

困ったときに頼りになる人。（困ったときって、どんなとき？）困るっていうか、どうにも動けなくなる感じ。（お母さんも対応してくれてるよね。お母さんと福崎との違いは？）お母さんは、ん～……「こうしたらいいよ」って、いう感じだけど、福崎さんは、話し合っていくような感じ。（お母さんと話しあうのは難しいの？）家族だからか……なかなか話し合いにくい。

以上のことから、家族以外のソーシャルワーカー的な支援を行う人の存在が、「他者」でありながら「存在を否定されない」安心できる相手となり得るのではなからうか。

事例 2：橋本敬史くん（仮名）との関わり

家族の状況

父親、母親、姉、敬史くんの4人家族。〈父親〉時間が不定期な仕事。日中自宅にいることもある。〈母親〉公務員、家事全般を行なっている。〈姉〉敬史くんの2つ上で、敬史くんが中学3年の時期から、自宅を出て寮生活を始めている。X-2年に姉が不登校になった際、筆者がカウンセリングで関わり、姉の不登校が解消した経緯があり、母親は筆者を知っていた。

〈敬史くん〉「言葉を文字通り受け止め、状況に合わせて適当に行うことができない子だった」とのことで、母親は「子育てがとても大変だった」と語っていた。性格は、真面目で穏やか。物静かで余計なことは言わないが、尋ねられれば自分の思っていることは率直に言葉にするためか、いじめに遭うことはなかった。地元の公立小学校卒業後、姉の通学していた中高一貫の私立学校へ入学した。小学、中学時代は特に問題はなく、高校もそのまま進級した。

気づかない間に、高校生活がままならなくなっていた時期

X年7月下旬（高1）母親がクリニックに来院し、「どうしたら敬史を診察へ連れてくることができますか？『一緒に病院へ行こう』と言っても『自分は病気ではない』と言って行こうとしません」と相談された。

そこで、筆者は「どんなふうに話したら敬史くんが納得して来てくれるか」母親と話し合った。翌週、そのやり方で敬史くんは母親に連れられ、初めて来院した。敬史くんは、2ヶ月近く睡眠不足が続き、憔悴しきっていた。しかし「休んではいけない」と思って必死に登校を続けていた。また自宅に飾ってあるぬいぐるみや人形などを拜んだり、空笑したり、小声の独語などの行動も認められた。

そこで、敬史くんが納得するように休養の必要性を伝え、そのために医師の診察を受けるように伝えた。医師の診断は、「統合失調症疑い」と「広汎性発達障害」だった（現在では、統合失調症的症状は認められない）。

診察後、医師は休養のための入院を指示し、翌日、近隣の病院へ敬史くんの同意を得て入院となった。入院してからは、ゆっくりと睡眠も取れ、統合失調症様症状も徐々に消失していった。1ヶ月入院した後、自宅でも睡眠が取れるようになった。

同年9月、母親と筆者は見守る姿勢を続けていたが、敬史くんの希望で2学期の初日から通常通り登校し始めた。しかし2学期中頃には、また睡眠が取れない日が始め、2学期後半は時間割の準備もできなくなった。夏休みに入院した話や今後の配慮について事前に学校側には伝えていたが、担任からは敬史くんが特に問題ないように見えていた。そのため「母親が過干渉すぎる」との見方をされ、担任に母親の要望が通りにくくなり、母親は学校で敬史くんをどうフォローしてもらえばいいか分からなくて困っていた。母親より筆者に「学校へ出向いて直接調整をしてほしい」と依頼され、学校に出向き、管理職、学年主任、担任へ、敬史くんの特徴を説明し、学校での様子を伺い、母親、学校、筆者の三者で、敬史くんがよりよい学校生活をおくるためにどうすればいいか話し合った。

その後も、母親からの要請があった時には、筆者が学校との調整を随時行っていった。先生方が敬史くんへの対応で困っていることを伺い、家庭の様子と擦り合わせて、対応策を練ったり、母親の対応について先生方が疑問に感じられる点を説明したり、敬史くんの状況や困難さを説明したりした。こうして、徐々に学校生活での混乱は少なくなり、以前より順調に登校することができるようになった。

9月以降、1～2ヶ月に1度、敬史くんのカウンセリングで話をしていたが、X+1年2月頃、敬史くんから今まで語られなかった「友人関係の悩み」が語られた。悩みとは、ある生徒に敬史くんが会う度、「この前、なんで学校休んでたの?」と質問され、なんと応えていいか分からず困っているということだった。黙っていても失礼だが、なんと応えていいか分からないので、その生徒に会うかもしれないと思うと緊張して辛かった。しかし、そういうことを親や先生に言うと、その生徒が叱られて嫌な思いをしてはいけないので、黙っていたとのことだった。そこで、その生徒が嫌な思いをせずに、かつ、その生徒が敬史くんへ声をかけないように、担任に調整してもらった。

その後、X + 1年2月～X + 1年4月下旬（高校1年から高校2年）までは、登校していた。

同年5月（高校2年）連休明けから休みがちになった。そしてその後、ほとんど学校に行けなくなったことから、進級が懸念され、全日制高校以外の進路（通信制高校や発達障害児対応の高校）を考えるようになった。

また父親は、登校できず自宅にいる敬史くんに対して、「寝過ぎじゃないか」、「学校に行け!」、
「将来のことも考えろ」と叱咤激励したり、一緒に山登りや農業をさせようとしたりと、当時の敬史くんには不適切な対応が目立った。父親にそう言われる度に、敬史くんは「自分はダメなヤツだなあ」と思ったとのことだった。

「自宅に敬史くんを父親と置いておくのが心配。父親を連れてくるので、筆者より敬史への対応を父親に説明して欲しい」と母親から依頼があり、敬史くんへの理解を父親に促すような心理教育を行った。一方で、敬史くんが穏やかに日中過ごせる場を探した。しかし敬史くんが暮らす地域はかなり農村部で高校生対象の公的支援施設がなく、同様の機能を持つ場所も見つからなかった。母親は、発達障害児対象の高校と、寮を見つけ、両親で見学にも行ったが、敬史くんの関心はその学校に向くことはなかった。

敬史くんに、全日制高校に通っていた時の話をきいた。

高校に行っていたけど、その高校に所属しているという所属感がなかった。自分も形だけはそこに入っているのだけど、自分だけは心の面では、高校の生徒になれてない感じです。それは高校のみんなが悪いとかそういうことではなくて、みんなも自分を排除しようとしてたわけでもなかったんですけど。みんな置き去りにしようと思っていないけど、自分からしたら置き去りにされているみたいな。

「学校はいかなければ行けないところなので、行くものと思っていた」しかし、全く馴染めず、身の置き所がない感じだったという。彼はそれを「世界の終り感」を感じていたと表現した。「世界の終り感というのはどういう感じ?」と尋ねると、「今にも未来にも全く希望がもてない。そしてこれから何も楽しいことがないという感じ」だと語った。

楽しくない日常の中でも周りのみんなは笑っている。楽しくないのに、なんでみんなは笑っているのだろうと。自分だけが取り残されて、みんなできるのに、自分だけができない。自分にとっては辛い大変なことも、みんなは何事もないように颯爽としている。とても辛かったけど、みんなが何事もないようにしているのに、自分だけ辛いと言えなくて辛かったし、辛いといえば自分の情け無さを露呈するのでよけい辛いですね。

「辛いこと」を「辛い」と言えない社会、「辛い」と言っても、同感できる他者がいない社会に、自分が身を置いていることを、敬史くんは語っている。

芹沢(2011)⁹⁾は、存在論的自己が脅かされる時、「しっかりとひきこもらなかったら、精神疾患になる」ことを示唆している。実際、「高校を辞めたい」とも、「行きたくない」とも言わず、「行かなければならない場所」として、行き続けた結果、敬史くんは、最後には統合失調症様の症状を呈して、入院せざるを得ない状況となった。

居場所としてのかたつむり学舎と、通信制高校への転校

同年6月中旬、「所属している限りは学校に行かなくてはいけない。けれど行けない」ということで、自宅にいても休めずにいた。そこで全日制高校は休学する手続きを取った。また居場所としてのかたつむり学舎の利用を提案した。X+1年7月下旬、発達障害児対象の高校へ母親と敬史くんが見学に行った。しかし遠方だったため入学は希望しなかった。敬史くんが高校を辞めることに強い自責の念を語っていたので、「今行っている高校が敬史に合わなかったから、合う高校へ転校するの」と母親が敬史くんを説得し、X+1年9月、通信科へ転校した。

全日制高校を辞めた時期のことを以下のように語っている。

(全日制高校の居心地がよくなるために)自分からもっと意見を言えばいい。意見を言えばいいんですけど、そしたらちょっとは変わる。でも意見をいうということは、情けない自分を見せることになるので、それがつらいですね。だから言えませんね。(ラジオ番組を聞いていて、その中では)「生徒(リスナー)が幸せになるなら、逃げてもいい」って言っていました。(全日制)高校辞める時、自分はこんなくだらないことで、なんで学校やめたんだろうって。でも実は重要なことなんですけど。でも逃げちゃって大丈夫かなと思いました。他の人達は何事もないように高校へ通い、颯爽としているのに、同じことが自分にはできない。できない自分は情けないと思っていました。

※()は筆者補足。

学校を辞めることが、存在論的自己にとって重要なことだと気づきながらも、社会的規範に沿わないことに対して心配になっている様子が伺える。

同年10月～12月、自宅から出る元気がなくなり、その後、半年近くほとんど外出しない日が続いた。その間、母親から様子を伺いながら、それまで関わりがあったかたつむり学舎のスタッフや筆者がたまに短い時間、顔を見に行ったり、電話で話をしたりした。自宅ではほとんど横になって寝

ていたとのことで、充電しているような様子だった。

同年12月末頃、通信制高校のスクーリングには、母親と行くことができた。3月ごろになって、TVを観るために毎朝7時に起きてくるようになり、リビングで過ごすことが増え、姉の引越しの手伝いをするなど少しずつ動きができた。

様々な体験を試みた時期

X + 2年4月（高校3年）になって「少しずつ元気が出てきたようだ」と母親から報告があり、週一回、敬史くんに行ってもよいか確認して、かたつむり学舎のスタッフが家庭学習サポートとして自宅に行って一緒に学習をしたり、オセロをしたり、話をしたりした。次第に自宅訪問も回数が増えていった。さらに同じく4月よりラジオ番組を聴き始め、「自分は***の生徒だ」と、ラジオ番組名を言い、そのラジオ番組がモチーフにしている「学校」への所属感を話していた。敬史くんによって語られるラジオ番組の「学校」では、「『生徒』思いの『先生』」が登場し、「『生徒』の悩みに耳を傾け」、お笑い芸人たちが社会的規範を笑いに変え、「『生徒』を絶えず応援している」。このラジオ番組によって、敬史くんの中で、「行かなければいけない、辛い学校」から「自分に合う、楽しい学校」へと、これまでの学校に対する価値を相対化させていったのではないかと考える。

同年8月、元気はあり、体調は本調子とのことなので「どう過ごしたい？」と敬史くん尋ねると、「これまでやらなければいけないことをしてきた。やらなければいけないことがなくなって、毎日することがなく退屈だが、やりたいことは特にない。退屈はしているが、それも寝ていればいいので大丈夫です」とのことだった。母親は「このまま寝ていても何も変わらない気がする」と話し、敬史くんも同じように話していた。

そこで「こちらからいろんなことを提案するので、やりたくないことでなければ、やってみよう。無理強いもしないし、途中で変更してもいい」と提案し、敬史くんから了承を得た。「やりたいこと」を見つけるには、様々な活動を体験することが必要だと考えたからである。このことについて、Skinner (1986)¹²⁾も、「直接的体験による随伴性が人を正しい方向（生命にとって良い方向）へ導く」と述べている。

具体的には、かたつむり学舎で通信制のレポート課題をしたり、英語や数学、論文の学習をしたりした。かたつむり学舎のスタッフと勉強したり対話したり出かけたりしながら、これまで感じたことやこれからのことを話していった。また週に1回、農的な体験（稲刈り、柚子搾り、種取りなど）を行っていった。他には、陶芸をしたり、美術館へ絵を見に行ったり、温泉に行ったり、図書館で調べ学習をしたり、文学記念館へいたり、環境活動の講演会を聴きに行ったり、調理実習をしたりした。また同時に自宅で敬史くんが家事を手伝えるよう母親に協力をお願いした。自宅で味

噌汁を作ったり、洗濯をしたりすることが日常的になっていった。そのような中、同年秋頃には、「どうしたら人に興味が持てるか」「どうすれば人と上手につきあえるか」と敬史くんの方から筆者に尋ねてくるという変化が起こった。

この先何をしたいのか体験して考えた時期

この先の生き方として、敬史くんは「どうしていくのがいいのか、自分は何がしたいのか決まらない」とのことだったので、かたつむり学舎や保護者の印象、希望、これまでの体験をもとにいろいろと提案し、敬史くんが嫌でないものはまず体験して、将来とつながりそうかどうか検討を重ねていった。敬史くんは母親に対して反発はなかったが、母親が「今後の進路についてどう感じているか」尋ねても「さあね」と言って、自分の考えていることや感じていることをほとんど言うことがなかった。母親は、何を考えているのだろうと不安になったり、先に進むためにどうしたらいいか心配になったりしていた。そこで、かたつむり学舎で聞いたことを随時母親に伝えていった。

X + 3年1月、発達障害児の大学も選択肢にあったが、敬史くんが希望しなかったため、他の選択肢として、禅寺に2週間ほど修行にいった。さらにその縁で別な一般大学を受験し合格したが、この大学には行かなかった。また禅寺は、お坊さんたちには「向いている」と歓迎されたが、敬史くんは希望しなかった。

同年3月、徒弟制度を行っている馬の牧場へ1週間で体験に行った。そのような試みの中で、敬史くんの行動が少しずつ変化していった。具体的な行動の変化としては、敬史くんが子どもの頃からずっと部屋に飾っていたぬいぐるみを全部処分したり、「これからは『敬史ちゃん』じゃなくて、『敬史』、もしくは『敬史さん』と呼んでくれ」と母親にお願いしたり、嫌いだから食べないと言っていた食べ物を食べるようになったりした。会話の仕方もちらの興味を尋ねたり、こちらの興味にあった情報を提供する話し方をしたりすることが増えていった。さらに高校卒業間近3月頃には、「友達が欲しいです。どうしたらいいですか？」と尋ねることがあった。敬史くんにとって、「友達とはどういう人か」「友達ができたら一緒に何をしたいか」などを尋ね、「他の人はどうやって友達になるか聞いてみよう」と提案した。

また敬史くんが自分から筆者や他のスタッフの好みを尋ね、それらに関する情報を提供するという行動が増えていった。さらに筆者やスタッフの人となりや生き方にも興味を持ち、「***さんは、小さい頃どんな子だったんですか？」「どうしてカウンセラーになったんですか？」など、これまでにない話題が増えていった。以前は、必要なこと、自分が話したいこと、そして尋ねられたこと以外は話さなかったもので、これらの変化によって、筆者も敬史くんと一緒にいて、おしゃべりすることが以前よりずっと楽しく感じるようになった。

安心して暮らせる場所について、敬史くんは以下のように語っている。

……信頼感ですかね。（ラジオは）未来のカギが見つければ聴かなくなると思います。（未来のカギやね。）……仲間がいて、うるおいがあれば、……そして安心して弱音が吐ける場であれば、自宅から離れて暮らせそうです。

同年4月（18歳）、今後どうするか検討した後、馬の牧場が一番、条件に合っていたので、5月から自宅を出て、馬の牧場へ行くことになった。

同年9月、馬の牧場で、徒弟制度のもと、他の仲間と寝食をともにしながら自分のペースでゆっくりと仕事を続けている。5月から最初の2ヶ月間までは、1～2週間に1度、筆者やかたつむり学舎のスタッフに「牧場での仕事ができないことで、みんなに迷惑をかけているから辞めたい」と電話がかかってくる。その内容を牧場の担当者に伝え、対応してもらった。その後、電話もなく、順調に過ごしている。長期休みで、自宅に帰ってきた際、「かたつむり学舎に来たい」と連絡があったことから、これまで敬史くんに関わりのあったスタッフや外部講師、かたつむり学舎の参加者に呼びかけ、「敬史くん一時帰国 カレーの集い」を企画した。敬史くんは、土産の果物を台所で切って、皆にふるまってくれた。いろいろおしゃべりをして3時間ほど楽しい時間を過ごした。

考 察

石川（2007）¹³⁾は、ひきこもりの困難さを「動けなさ」と表現した。石川のインタビュー調査の中で、当事者はこう語っている。「自分は障害者だと思う。こういう言い方に強く反発する人もいるし、自分でも抵抗感はある。でも、それで周りが『この動けなさに』納得してくれるなら、私は障害者だと言ってくれたほうが楽だ」と。インタビューを通して、石川は、ひきこもりを、個人に内在する問題としてではなく、当事者から社会への問題提起として捉え、「働けないことは、個人の道徳的・人格的欠陥であるかのようにみなされ、引きこもっている当人もおなじように感じている。（中略）働いていないことを過度に貶めるような価値観が広く共有されている社会によっても、引きこもらされている」と言及する。本稿で紹介した二つの事例も、「困って動けなくなった」または「動けなくなって困った」表れとして「ひきこもり」になっており、石川の論と重なる。

この当事者の「困った局面」と、その当事者と暮らす家族をどう支援したか。かたつむり学舎の二つの事例の関わりでは、家族と絶えず連携しつつ、①家族以外の他者が当事者と関わり、②彼らの存在を全肯定し、③社会的規範に囚われることなく対話しながら当事者が行動を決定し、④決めたことを実行できるように援助し、⑤状況に応じていつでも変更・調整し、⑥やりたいこととできることが重なる選択肢を社会の中に探したり創ったりしていった。この①～⑥の繰り返しは、社会で生きていくための試行錯誤であるといえる。また就労・就学支援との大きな違いとして、就労や

就学を目的としなかったことである。当事者がやりたいことを応援する中で、これからやっていく何かを探す手伝いを共にしていった。その結果として、当事者たちは、体験や可能性や希望が増えれば増えるほど、人と関わり、社会に関わりたい欲求が出てくるようになった。

では、どうして上記の関わりが効果的だったかということについて、検証したい。

ここで、まず「①家族以外の他者が当事者と関わり、②彼らの存在を全肯定」する必要性について、折出(1984)¹⁴⁾の「現象学」の自立論である3つのテーゼを見てみたい。「(1)自立は、他者への依存と互いの承認によって可能である(2)自立とは、対象とのあいだの対立を乗り越える統一と闘争の過程である(3)自立とは個性化である」と。つまり、社会の中で人間が自分の外に自分との関係の深い対象をもち、これに働きかけ、その対象の自分への働きかけによって、自己を認識し、自分の認識する自己との統一を図る過程、すなわち「働きかける者が働きかけられて自己を生み出す」過程を「自立」としている。

自己を知る手がかりは、その存在を他者へ映すことだ。その他者を通してしか、私たちは自分を見ることができない。つまり他者への働きかけが途絶えてしまいがちな、ひきこもり状態は、自立にとって必要不可欠なこの自己像の形成を難しくしてしまうのである。

ひきこもりを経験した当事者は、自立期において、自己を形成するための他者(社会)が、自分のありのままを肯定する形で立ち現れなかったため、実像としての自己像がうまく形成されないまま自立できずにいた状態であったといえる。そのような中、さらなる自己存在の否定を免れる唯一の身近な策として、ひきこもり状態になったと考えられる。「自分は何者か」「自分はどうか、この世に存在しているのか」私たちは、他者の眼に映る自分を見ることでしか、それを感じるができない。ひきこもりを余儀なくされた人たちが、もし他者の眼の中に、穏やかで楽しそうな自分の姿を見る機会が増えたら、ひきこもる理由の多くがなくなっていくのではないだろうか。それは、自己像に揺れる精神障害者や認知症の人、その他、社会的に排除された多くの人たちにも共通することかもしれない。

次にその支援の全体像についてだが、鈴木(2004)¹⁵⁾は、現存する援助技法と支援過程を統合した「引きこもりの地域支援モデル」を提示し、地域にある様々なリソースを活かしていくためには、「ケースの全体を見通し、流れや変化を把握しながら、本人の意志に添った援助が受けられるよう、アセスメントをし、全体をマネジメントすることのできる、いわば中心機関が必要となる」と述べている。このことは、当事者支援、家族支援に関わらず、病院、クリニック、デイケア、フリースペース、家族教室、メンタルフレンド、家庭訪問、家族会、自助グループ、就学・就労援助機関など、それぞれの役割別の支援を、当事者や家族が「どう生きていきたいか」という願いや好み、やり方、タイミングに合わせて、つなぐ役割の必要性を示唆している。ここで、当事者や家族の生活の視点に立って寄り添うソーシャルワーカーの必要性が浮かび上がる。

さらに就労支援の方向性に限定すれば、一部その役割を実践している場がある。有吉(2011)¹⁶⁾は、公的な就労支援施設¹⁷⁾での実践から、そこを訪れる若者の心境を、「『彼ら彼女ら』には、『社会の中に適合できない』存在、あるいは『社会の底辺にいる』立場であると(自己を)認識し」、「『ひきこもり』『ニート』『フリーター』『非正規労働』といった専門家が括る定義による言葉を超

えた、社会からの『排除感』がある」と分析した上で、「そしてそんな彼らに対して、「一人の子ども・若者がさまざまな困難を解決したり、現状と折り合いをつけながら社会の中に『居場所』と『出番』を見つけることを手助けすることが、ひきこもり支援の全容なのだ」と述べている。

以上、かたつむり学舎の実践を通して、一人ひとりに寄り添って行っていくソーシャルワークの必要性を検証した。どのような状況にあっても、誰もが個別に、社会生活を支えられるような公的支援の構築が望まれる。

おわりに

支援とは、「ささえたすけること。援助すること」¹⁸⁾である。特に、豊田(2011)¹⁹⁾は「窮状を訴える一人ひとりに添いつつ、援助すること」を「ソーシャルワーク(=social work)」と呼び、一人ひとりへの「添い」の重要性を提言している。「社会的に生活すること」に不都合が生じた一人ひとりに、寄り添って行う援助こそがソーシャルワークであり、「ソーシャルワークは『添いの知』の実践である」と述べている(豊田 2011)¹⁹⁾。「〇〇問題」「〇〇対策」「〇〇への支援」というように、問題に対する対応をひと括りにするのではなく、その渦中にいる一人ひとりに関わることで初めて、「彼らはどんな時に何に困り、どんな支援を必要としているのか」が分かるのである。

ひきこもり支援においても、ニーズや特徴が異なる当事者・家族一人ひとりに寄り添い、彼らの存在や想いを肯定し続け、当事者とその家族にあった社会資源とをつなぐ取り組みが必要であるが、それはかたつむり学舎だけでは不十分である。今後、かたつむり学舎のようなソーシャルワーク的な取り組みが広がっていくことが望まれる。

また、友里さんと敬史くんの「居場所」と「出番」を探して、学校や社会を奔走してきたつもりだったが、筆者が活動を通して学んだことは「社会的規範を超えて、『居場所』や『出番』を見つけるのは至難の業だ」ということだった。彼らに関わる中で、彼らが、そしてひきこもりの人の多くが社会的規範に準じて、自らをそれに合わせようとするのは、「オルタナティブな選択肢が少なすぎるからだ」と痛感した。そのため、彼らを支援していくためには、かたつむり学舎のようなソーシャルワーク的な取り組みに加え、社会の中にオルタナティブな選択肢を増やしていく必要がある。

存在するだけで尊重される「居場所」や「出番」が、誰にとっても必要である。それらが保障されなければ、社会的規範に当てはまらなくなった時に自分を肯定することなどできない。社会的規範に添えない彼らへの支援とは、社会が望む「何か」ができるようにするための支援でなく、まずは、ありのままの彼らが地域で生き活きと生活していけるための支援であろう。

注

- 1) かたつむり学舎ホームページ<http://www7b.biglobe.ne.jp/~katatsumuri/>
- 2) 厚生労働省2010『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』
- 3) 内閣府2010『若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書』
- 4) 山田均2011「特集-ひきこもり支援論 特集にあたって」『臨床心理学』11（3）pp.319-323
- 5) 吉川悟2011「ひきこもりへの治療的対応-家族療法の立場から留意していること」『臨床心理学』11（3）pp.347-355
- 6) 内閣府2010「子ども・若者育成支援推進法」
- 7) 石川良子2006『「ひきこもり」と「ニート」の混同とその問題-『ひきこもり』当事者へのインタビューからの示唆-』『教育社会学研究』79 pp.25-46
- 8) 鈴木晶子2004「引きこもり地域支援の現状と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』44,pp.227-239.
境泉洋・石川信一・滝沢瑞枝・佐藤寛・坂野雄二2004「家族から見たひきこもりの状態—その実態と心理的介入の役割-」『カウンセリング研究』37（2）pp.168-179.唐澤由理・佐野秀樹2002「ひきこもる青年への支援？ 民間支援団体の活動状況および関連諸機関との連携に関する全国調査報告」前掲35（3）pp.265-275
- 9) 芹沢俊介2011「『ひきこもり』をどう理解すべきか」『臨床心理学』11（3）pp.324-329
- 10) 石川良子2011「『ひきこもり』の分からなさ」と向き合うことから見えたもの」『臨床心理学』11（3）pp.330-335
- 11) 芹沢俊介2010『「存在論的ひきこもり」論』雲母書房
- 12) Skinner.B.F（1986）“What is wrong with daily life in the western world.” *American Psychologist*, 41,568-574
- 13) 石川良子2007『ひきこもりの〈ゴール〉-「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社
- 14) 折出健二1984『人間的自立と教育』青木書店
- 15) 鈴木晶子2004「引きこもり地域支援の現状と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』44,pp.227-239
- 16) 有吉晶子2011「多様なひきこもりを支援する-『居場所』と『出番』作りに伴走する」『臨床心理学』11（3）pp.367-373.
- 17) よこはま若者サポートステーションに通う若者に対して、臨床心理士として、アセスメントを行い、カウンセリングやコミュニケーションの改善を目的とした認知行動療法、SST（ソーシャルスキルトレーニング）、状況に応じて居場所づくりとしてのフリースペースの提供、ジョブコーチの代わりとして作業の指導、障がい者手帳の取得のための自己理解援助、職場へ理解を求める話し合いなど、個別に支援を行っている。
- 18) 新村出編1969『広辞苑』〈第二版〉岩波書店 941頁
- 19) 豊田謙二2011『一人ひとりの社会福祉』ナカニシヤ出版

Abstract

**Case study of creating supportive environments for “Hikikomori”
Experiences at “Katatsumuri-gakusya”**

Haru FUKUZAKI

“Hikikomori” is widely known as a word however, neither of its definition or the kinds of supports needed have reached a consensus yet.

The purpose of the paper is to identify factors of effective supports environments for youth in the state of “Hikikomori”. Through the hands on experiences and interviews with youth in “Katatsumuri-gakusya”, the author found the following essences to create supportive environment for the “Hikikomori”.

1. Be around and available as a non-family member, 2. Accept and recognize for who they are, 3. Communicate them with an attitude that free from social norms and way it works until the youths can make decisions on their own actions, 4. Support their action taking steps, 5. Adjust flexibly on necessary changes, 6. Search or create options that they want to and can in a society.

These factors, in fact, are critical experiences in life not only for those who in a state of “Hikikomori” but also for any individual. Each of us needs social work for joining a society, when we can not gain these experiences.